

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	宮本 和歌子
論文題目	江戸川乱歩研究 隠された主人公達を表舞台へ		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、近代日本文学を代表する探偵小説作家の一人である江戸川乱歩 (1894~1965) の『ぺてん師と空気男』 (昭和三十四年十一月)、「猟奇の果」 (昭和五年一月~十二月)、「闇に蠢く」 (大正十五年一~十一月、昭和二年十月)、「人でなしの恋」 (大正十五年十月) の四作品を取り上げ、それぞれの成立背景となった材源を究明しつつ、併せて「一人二役」 (またはその変形としての「二人一役」) という共通のモチーフを考察したものである。タイトルの「隠された主人公達を表舞台へ」とは、乱歩文学の特徴である一人二役・二人一役が、目立たない形ではあるが、確かに上記諸作に認められ、作中において重要な役割を持っている、との謂である。</p> <p>第一章では、江戸川乱歩晩年の、実質的には最後の小説となった『ぺてん師と空気男』の主な材源が、アメリカの新聞記者Harry Allen Smith著のプラクティカル・ジョーク集 <i>The Compleat Practical Joker</i> (1953) であることが明らかにされる。本作に登場する二十のプラクティカル・ジョーク (実際の行為によるからかい、いたずら) のうち、実にその半数以上の十二がほぼそのまま本書に依拠していることが、英文と本作本文を併記することによって実証される。併せて、本作の主人公伊東と野間が、それぞれ、乱歩の探偵小説家としての理想を投影した人物、乱歩同様風変わりで異常な絵空事に興味を抱く人物であること、従ってこの二人が乱歩の分身であり、いわば二人一役的な存在であることが詳述される。さらに、<i>The Compleat Practical Joker</i> にも、存在しない人物を人々に信じ込ませるジョークが見られることから、一人二役好きの乱歩が本書を好んだのではないかと考察される。また、本書のジョークと共通する江戸時代の落語や中国の笑話集が考証され、探偵小説のみならず、落語や手品をも愛好する乱歩のジョーカー精神が分析される。</p> <p>第二章では、「猟奇の果」の成立背景に、宇野浩二「二人の青木愛三郎」 (大正十一年一月) と村松梢風「談話売買所から買った話」 (大正十年四月)、野田良吉訳・黒岩涙香訳『幽霊塔』 (明治三十四年) のあったことが論証される。まず「二人の青木愛三郎」において、思想や発想 (内面) が共通する青木愛三郎と戸川介二の二人が、本作では容姿 (外見) のそっくりな青木愛之助と品川四郎の二人に投影されていること、すなわち二人一役の関係にあることが論証される。これを踏まえて、「談話売買所から買った話」からは、外見のそっくりな男が相手に成り代わり、ついには妻を奪うに到る設定など、細部に涉って本作がこれに依拠していることが実証される。さらに『幽霊塔』から、薬剤と電気を利用した「人間改造術」の撰取されたことが明示される。また、本作の原構想には、『ぺてん師と空気男』に繋がるプラクティカル・ジョーク的発想のあったことが指摘される。</p> <p>第三章ではまず、「闇に蠢く」の主人公野崎三郎と、靱山ホテル主人とが二人一役的な関係にあり、ともにえびす神 (恵比須三郎) を下敷きに造型されたことが論証される。すなわち、野崎「三郎」と「恵比須顔」の靱山ホテル主人とはお互いに親近感を持ち、「ピチピチ踊つてゐる鯛の様」なヒロインお蝶を我がものとし、さらに靱山ホテル主人はかつて海上を漂流した体験を持つからである。さらに、飢餓に迫られ食人行為に駆られた点でも両者は共通し、靱山ホテル主人の死が野崎の死に繋がる点でも、両者は分身の関係にある。次に、食人のモチーフのみならず、プロットの点でも、本作が近松半二等の浄瑠璃『奥州安達原』に依拠していること、漂流中の食人がジュール・ヴェルヌ著・</p>			

安東鶴城訳『生き残り日記』（大正二年。原名*Le Chancellor*）に依拠していることが詳述される。

第四章では、主人公が愛する人形と一人二役を演ずる「人でなしの恋」について論述される。生身の男である門野が人形のように生氣に乏しく、その容姿について具体的に記述されないのに対して、門野から愛される人形には、生々しく詳細な描写がなされていることから、人形と人間の立場の逆転が指摘される。それを語る門野の未亡人京子にも、人形を人間と同列に考える感性が顕著であることから、人形のような門野と、彼を愛する京子とが、同類であることが考察される。従来、タイトルの「人でなし」とは、人形しか愛せない門野を指すと捉えられてきたが、人形のような門野を愛し、人形を壊すことで門野をも死に迫りやる京子にも、その形容が当てはまる、と結論づける。併せて、『宮川舎漫筆』『新吉原常々草』など、江戸時代の随筆・浮世草子等が博搜され、精巧な人形には魂が宿ること、また大人の性的な玩弄物にもなったことなどが明らかにされ、これらが本作の人形愛の背景となったことが論証される。

「おわりに」では、以上四作品の考察を通じて、乱歩における一人二役・二人一役の重要性が再確認され、また、*The Compleat Practical Joker* や村松梢風「談話売買所から買った話」など、探偵小説のカテゴリーに入らない作品、乱歩が愛読を公言していない作家・作品への目配りの必要性が主張される。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、江戸川乱歩の『ぺてん師と空気男』、「獵奇の果」、「闇に蠢く」、「人でなしの恋」の四作品について論じたものであるが、その成果は、以下の二点にまとめることができる。

第一に、Harry Allen Smithのプラクティカル・ジョーク集*The Compleat Practical Joker* や、村松梢風「談話売買所から買った話」など、探偵小説のカテゴリーに入らない作品、乱歩がほとんど言及していない作品が、乱歩文学の主要な材源となっている例を、作品に即して実証した点である。乱歩は、自作の成立事情について自注や回想を残すことが多かったため、従来の材源研究は、その自作自注を後追いする方向で行われてきた。しかし当然、それだけでは不十分である。特に、乱歩晩年の作品『ぺてん師と空気男』の場合、実話ジョーク集である*The Compleat Practical Joker* から多くの実例をほぼそのまま利用したためか、乱歩自身が本書に言及することはなかった。本書が材源であるとの指摘は、乱歩の創作力の衰えを示すものとして学界で注目され、高く評価された。また「談話売買所から買った話」の場合も、探偵小説ではなく中間読物であり、乱歩も作品名を明かしてはいない。本学位申請者は、蔵書家であった乱歩の蔵書目録を精査し、また乱歩の曖昧な回想に基づいて丹念に雑誌を調査するといった地道な作業を積み重ねることで、上記の材源を突き止めた。その他、先行研究や乱歩自身の自注に基づき、宇野浩二「二人の青木愛三郎」、野田良吉訳・黒岩涙香訳『幽霊塔』、ヴェルヌ著・安東鶴城訳『生き残り日記』などがいかに乱歩作品に摂取されていたのか、具体的に論証した手堅さも評価される。さらに、軽口本や浄瑠璃『奥州安達原』、随筆『宮川舎漫筆』、浮世草子『新吉原常々草』など、江戸時代の軟文学・随筆類を博搜することで、乱歩文学が決して探偵小説・同時代文学のみによって成立したものではないこと、その背後には江戸文学の豊穡な世界が控えていることを明らかにした。

第二に評価される点は、上記四作品の考察を通じて、乱歩における一人二役・二人一役の重要性を改めて確認した点である。『ぺてん師と空気男』の主人公伊東と野間は、前者が奇抜なプラクティカル・ジョークを考案・実行する人物、後者は伊東に引きずられるだけの受け身の人物といった描かれ方であるが、本学位申請者は、乱歩の経歴を精査することによって、いずれも乱歩の半面を投影させた分身的人物であり、いわば二人一役的な存在であることを論証した。また、「闇に蠢く」の野崎三郎と靱山ホテル主人とが、いずれもえびす神（恵比須三郎）を下敷きに造型された分身的存在であり、結末における野崎の不自然な死が靱山ホテル主人の死に起因するとした考察も説得力を持つ。すなわち、自己の分身が消えるのを見た人はやがて死ぬ、という中国や日本の「離魂病」説話を参照することで、作品内では説明されなかった野崎の死の理由を明らかにしたのである。また「人でなしの恋」論では、人形に恋をした門野と、人形のような門野に恋をした妻京子とが同類であり、門野と人形とが一人二役、門野と京子とが二人一役の関係であると考察した。従来、門野と人形のみが考察されてこなかった中で、京子を含めて三者の関係を捉え直した点は、高く評価されよう。以上のように、一読しただけでは気付きにくい一人二役・二人一役の設定を四作品について個々に明らかにしたことは、以後の乱歩研究が踏まえるべき重要な視点を提供したものと見えよう。

とはいえ、本論文で取り上げられた四作品は、「人でなしの恋」を除けば余り知られていない作品であり、これまでほとんど研究対象とされてこなかったものである。乱歩の代表作について知られざる材源を探求することや、一人二役・二人一役の設定

についてももう少し対象作品を広げて論ずることは、今後の課題として残されていよう。また、「人でなしの恋」で、京子が門野の愛する人形を破壊したのは、門野を死に追いやろうとする「プロバビリティーの犯罪」ではないか、との解釈には、若干の疑義を覚えなければいけない。しかし、文学作品の研究において、細部の解釈に相違が生じるのはむしろ一般的なことである。それ以上に、従来の研究を超えて幅広い領域にまで材源探究の手を伸ばし、着実な成果をあげた点、また一人二役・二人一役というモチーフの重要性を再認識させた点で、本学位請求論文は、日本近代文学の研究として高く評価できるものである。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年1月17日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降